# 本報告書の要約

**(1) 増加する勉強時間**

学年が上がるにつれて、勉強時間は増加する。ただし、高校生になると勉強する生徒としない生徒に二極化している。(図Ⅰ－1)

**(2) 身についていない学習習慣**

基本的な学習習慣は、予想外に身についていない。しかも、学年が上がると、この傾向は顕著になる。(図Ⅰ－4)

**(3) 宿題中心の中学生、予習が重要になる高校生**

家庭学習では、中学生は学校の宿題が中心だが高校生になると授業の予習の比重が高くなっている。
(表Ⅰ－5)

**(4) 問題集・暗記中心の中学生**

中学生の家庭学習は、参考書よりも問題集を多く用い、暗記が中心である。
(表Ⅰ－6)

**(5) 日常的な授業中の小さな逸脱行動**

授業中のおしゃべり、手遊びなどは、どの学年でも非常に頻繁である。しかし、板書をノートに写す、先生の話で大切なところは自発的にノートに書くなど、やるべきことはきちんとやっている。(図Ⅰ－7)

**(6) 小学生の授業中の学習行動の構造**

小学生の授業中の学習行動は、「自発的学習」「注意散漫」「参加」「難易度」の4つの因子によって関連づけることができる。(表Ⅰ－9)

**(7) 地域差の大きい学習塾・予備校通い**

学習塾・予備校の利用率は高いが、地域差が明らかである。東北19.0%、四国31.3%、東京51.0%と、地域の教育事情を反映している。(表Ⅰ－12)

**(8) 日常生活における学習行動は減少**

遊びや手伝いといった、幅広い意味での日常生活における学習行動は、学年の上昇とともに減少していく。ただし、家族との会話、マスコミとの接触では、学年が上がるとともに多くなっている。(表Ⅰ－14)



**(9) 小学生の日常生活における学習行動の構造**

小学生の日常生活における学習行動は、「家族との会話」「自発的学習」「身辺自立」「戸外生活」の4つの因子によって関連づけることができる。(表Ⅰ－16)

**(10) 疲労の色濃い日本の小・中学生**

小学生の段階から、「あくびがでる」「だるい」など、不調を訴える割合が高い。ただ意外なことに、中学受験(小学生)、部活動(中学生)と疲労の間に有意な差は見られない。(図Ⅰ－11、表Ⅰ－20、表Ⅰ－21)

**(11) 進む成績の自己限定**

がんばればとれると思う成績は、中学生になると全体的にレベルが低くなる。しかし、現在の自分の成績と比べると高く、自信をもっている者が多い。(図2－3)

**(12) 浸透する努力信仰**

よい成績をとるために必要な条件は、小・中学生ともに、「努力」がトップであり、この傾向は女子に顕著である。中学生になると、勉強のテクニックが重要視されるようになる。(図2－4、図2－5)

**(13) 好きな教科、嫌いな教科**

人気教科は、体育、家庭、芸術関係で、学年が上がるにつれて嫌いな教科が増え、男女の差もみられる。特に、高校生では、「女子の理数系嫌い」が拡大、定着している。(図2－8、図2－9、表2－1、表2－2)

**(14) 学習の悩み**

小学生で一番悩みが多いのは、「もっと成績をよくしたい」である。中学生では、「上手な勉強の仕方」、高校生では、「学習内容や学習そのものの意味について」と、悩む内容にも差がある。(図2－14、図2－15、図2－16)

**(15) 一生懸命勉強すると出世に役立つ**

中学生、高校生共に、勉強を出世の手段と考えており、成績上位者ではこの傾向が強まる。また、高校生になると、「心豊かに幸福に生きるため」に勉強すると考える割合は大幅に減少する。(表2－5、表2－6)